



空色

gajile

—某県庁所在地にある水嶋高等学校—

"その学校は超成績優秀のお坊っちゃまお嬢様の進学校...というわけでもなく、ただの平凡な高校だ。

だが、少し、少しだけ治安が悪いただけなんだ。"

俺は少しだけならいっか、そんな思いで無事入学。

そして俺は思い知らされた。

実はその学校、県内の高校で一番治安の悪い学校だったのだ。

俺は自分のアホさに

いつもながら呆れた。

「だぁから言っただろ治安悪いって」

俺の隣に歩くのはの双子の兄、村崎快斗。

そして俺は村崎俊。

...くそう、双子なのに何の繋がりもないぞこの名前。

「快斗が言ったんだろ、少しだけって。聞いてねえぞ一番治安悪イなんて」

「言ってねえもん」

「ういコルア」

いつ俺がこの学校の治安の悪さを知ったかというとな...

入学式早々だった。

校舎は壁一面に落書きされておまけにカツアゲもされたのだ。

ああ、思い出したら腹が痛い(汗)

試験場も超綺麗な違うところで受けるし、詐欺じゃないか??これは。

「言っとくケド、水コー、ワーストNo.1で結構有名だしな」

「まじでか」

「だから知らなかったお前が悪い」

「ふざけッ!!...~つか!!お前も何でココ来たんだよ。お前そんなにケンカ好きじゃねえだろ」

「まあな、俺はここには彼氏探しに来たから」

キラキラと平然と言う快斗。

そこ、彼女じゃないか??

と誰もが突っ込むだろう。

だが、快斗は何とゲイだったのだ。

いや、もちろん俺はノーマルだぜ??

しかも快斗はルックス、スタイル共に男としての性格抜群。

そして、負けず嫌いなケンカっ早い野郎が好みらしい。

何か可愛いらしいぞ。

意味わからん(汗)

「このガッコ、可愛い奴いっぱいいいそうだしな」

ついていけない!!

「...はあ...俺は女つくる」

ボソリとそう宣言すると、快斗はウザい程にニヤリと笑って言った。

「その平凡なルックスでモテるとは思えねえけどなあ」

「っせえ!!つくるったらつくる!!」

そうなのだ。

俺は快斗と違い、とても平凡な容姿をしている。

本当にお前等双子かって程の違い。

俺達だって疑ったさ!!

でもDNAやらなんやらの検査をしてでも医療機関は俺達を双子だと言い張った。

こんな双子、世の中にいるのだろうか...(泣)

不良学校と言ってもアレだ。

不良なのは男子だけであって女子は口が悪いだけの女だ。

まあ、可愛いコもそこそこいる。

良いことだ。

俺と快斗はクラスが違ったので廊下で別れる。

一応そこそこクラスに馴染んだので挨拶しながら入った。

ツレもできて今はちっとも怖くない。

「おーす」

「オーッス俊!! あっ、ちょーコレ見てくれ!!」

彼はやたらテンションの高い月代匠海(ツキシロタクミ)

髪を金に染めて不良中の不良だった。...何故友達なのだろう...(汗)

「あん?? どうしたよ」

匠海が鞆の中からジャーンツと出したのは

「青山ちゃんの特別号!!」

エロ本だ。

をぉー!!

と、くいついてやりたいところだがここは教室だ。

そして女子もいる。

「おま...ここ学校だぞ??」

「わあかかってるって!!」

そう言いながらもアダルト雑誌(エロ本)を鞆に入れない彼に一言言ってやった。

「彼女つくりたくねえの??」

「ダイジョブダイジョブ!! 一応俺モテるしな、お前と違って。ヒャハッ!!」

うぜええええええええ!!!!

と、まあ俺の日常はこんなモンだ。

しかし、数日たっても解けない謎があった。

もう一度言うておく。

ここは県内一の不良学校だ。

なのにこれは何だ??

皆真面目に授業を受けているのは何故だ!!

落ちこぼれじゃないのか!?

というか不良学校で授業真面目に聞くとか反則だろーが!!

どういう仕組みなのだ??

は!!そっだ、番長は!不良学校なら番長が必ずいるはず!!

という事で匠海に聞いてみる事にした。

「あ??番長??あぁそれなら3年にいるぜ。麻間了さん。俺その人の下につくつもりだから」

「あさまりよう??」

「そうそう。あ、でもな、この学校にはもう一人、裏番がいるって話だ」

「裏番??」

「おう。あんだ??俊も下につくのか??」

めっそうもない。

俺は平和主義だ。

「んだ違うのか。ま、お前ケンカ大嫌いって顔してんもんな」

「どんな顔だよ…。あのさ、ちょい聞いてえ事あんだけど」

「ん??」

「皆、スゲー勉強真面目だけど、ここ不良学校だよな??」

匠海は少しきょとんとしたかと思うといきなりふいた。

「あんだよ!？」

「はは!!!!おめえ、知らなかったのか??」

「何が」

彼は腹を抱えてヒーヒー笑っているので、少しム、とした。

「俊、いいか??この水コーは県内ワーストNo.1ってこたもちろん知ってるよな??」

もちろん。

快斗に教えてもらったしな。

知っていたらこんなトコ出来れば入りたくなかったわ。

「この学校はその不良共のすっげーエリート校なんだよ。だから皆ヤニとかヤクはしねえんだ。その恐ろしさは勉強で充分分かってっかんな」

「うーん...良くわかんねえんだけど...」

俺が頭を抱えていると、匠海は親身に答えてくれた。

「そうだな、例えるなら小坊いんだろ??アイツ等ってヤンチャで問題児だけど、テストはやるときやるじゃん。なんて一の??たまにいるズル賢い小坊。あーゆーの。おけ??」

「な、なんとなく」

俺はがんばって頭の中で整理してうなづく。

「んでもそんなのいくら不良でも勉強してたら嫌でも真面目にならね??もしくはケンカとかばっかだったら勉強はちょっとおろそかになんじゃないかな??」

疑問になっていた事を聞くと、匠海はニヒッと笑ってビッと人差し指を立てた。

「そこがこの水コーのスゲエところよ」

「ああ??ワケわかんねえよ」

頭をかきむしると匠海は苦笑して最後に一言。

「ま、見たまんまの奴らって事よ」

「...ふーん」

もう自分の頭では理解できなかったので適当に流し、とりあえず女探しに周囲を見渡した。

そして

数日後、

水コーが県内ワーストNo.1で成績がめちゃくちゃ良いという

不可思議現象の実態を

俺は目の当たりにした。

授業中、窓からそよそよと気持ちの良い風が入ってくる。

「で、あるからして———」

先公の話を聞いていると、いきなりその窓の向こうからドス声が聞こえてきた。

「つい、ごるああああ!!!!山茶花のお出ましたあ!!今日こそ決着つけんぞ!!!!」

俺は一瞬動きを止め、校門を見た。

そこには驚く程の人数がバットや角棒を持ってこっちを睨んできていた。

本当にこんなのあるんだなあ。

そんな感じで再度黒板に目を戻す。と、そこで異変に気が付いた。

男子のほとんどがいなくなっていた。

「...、...んん??」

先公は構わず授業を進めている。

またしばらくすると、

...ああ、

不良の"音"が聞こえる。

殴る音

誰かの叫び声

その光景は恐ろしくて見れない。

...とりあえず、

おやすみ。

...ついていけん...。

山茶花高校とは、県内ワーストNo.2を誇る不良高校である。

気がつくときケンカに出払った生徒達はそれぞれ怪我を作りながら自分達の席についていた。

その中の一人、匠海にコッソリと囁く。

「おかえり」

「おうっ、いやー水コーのケンカ初めて行ったけど、強いわぁ皆。特に先輩達がサ。俺等出る幕ねえったら」

「そ、そーか。と、ところで皆いつの間に帰ってきてたんだ??」

「ああ、番長がケンカ終わった後、すぐに教室に帰って授業受けろって言われたから。将来困んぞって前に言われてたんだよ。だからすぐに戻ってきたぜ??」

実は番長優等生!?

「あー彼女ほしー」

こう思うのは健全な男子高生の証拠だろう。

パンを片手に言葉を紡ぐ。

「だからさぁ、匠海、俺は思うワケよ」

「あにがだよ」

「なんで...普通の高校、行かなかったのかなって...」

「素朴な疑問だなww」

昼休み、ご飯を屋上で食べる俺と匠海。

「だあってよお、いやホント不良高校でも女子いるけどさ、やっぱ、ちょい不良めいてんじゃん。俺が求めてんのはピュアな女子コーセーなのよ。友達から始まって、んで『私、俊の事、好きになっちゃったみたい』とか言われてえ、『俺もだよ』とかあッ!!」

「ないない」

スパッ綺麗に切り捨てる匠海に俺は涙を流した。

「即答すんなよっ!!憧れじゃん??」

「俺はそーだなぁ」

「ちょ、スルーすんのやめてくれる??」

匠海は器用にパンを女のコの代わりに使い、シュミレーションしてみせた。

「まず俺から近付いてって『ねえ、俺と、試してみない??』で始まる恋。『匠海、あたし実は、初めてだったの』『そりゃ嬉しいな。なぁ、今度、また会おうよ』って二人の距離を縮めていく俺」

「最初から縮みすぎだから距離。てか体から始まってどーすんの」

「最近の恋愛ってそんなの多いらしーぜ」

「うそつくなぁッ!!」

ひらひらと手をふる匠海の手を軽く払う。

「うそはついてねえよ」

「それお前だけだから。あーッもう恋してえ彼女欲しー!!」

パタリと仰向けに倒れて青空を見る。

なんて綺麗な青空なんだ。

すると匠海も転がって来て言った。

「んじゃサ、合コン、する??」

「ごっ」

合コンだとおおおおお!!??!!

撃沈

撃沈でした。

初、合コン。

「何がいけなかった!!!!」

「あー、人選ミスだな。うぁ死んだ」

今は休み時間。

匠海は俺の前の席でこっちを向いてゲームをしていた。

「人選ミス??」

「あー。俺にお前、亘に...快斗」

亘とは同じクラスの平河亘。

そして快斗が...

俺の双子の兄だ。

あのルックスが超イイ、ゲイ野郎だ!!!!

「つか匠海!!何で快斗呼んだんだよ!!アイツならモテるに決まってんじゃねえかよ!!」

合コン撃沈理由は、そう、あの快斗が女子全員持っていきやがったんだ!!

「つかお前等双子だったんだな」

「そーだよ!!てか俺の質問答えろよ」

「あーもーうるせえなあ。一人はルックス超良いヤツいた方が良いだろ??んで話しかけたら承諾してくれたんだよ。もうアイツお前と違って超良い奴」

「どこがだよ。てかさりげなく俺の事悪い奴って意味こめてんじゃねえ」

俺は一つため息をついて机につっぷつした。

「結局...合コンでも駄目だったじゃねえか...」

そして、数日後...

その日はやってきたのだ。

しかも唐突に。

「あー、明日も小テストかよ。うぜえ。てかわかんねえよ今の範囲」
ぼやくと隣にいた匠海が親指を立てて言った。

「それ何の自慢にもなってねえし」

電車に乗るため、階段を下りていく。

匠海とダチになってから一緒に帰るようになっている。

金髪と黒髪。

不良とパンピー(一般人)。

不釣り合いすぎじゃね??

そう思いつつも並んで歩く。

その日は昼間に雨が降って足元がぬかるんでいた。

"キャッ"という声が響いたかと思えば俺達が下りている少し下の方で女の子が一人、こけていた。

すぐさま俺は階段を下り、彼女に駆け寄る。

「大丈夫??」

「うえっ??あ、は、はい、ありがとうございます...」

「立てる??」

「は、はい、大丈夫です」

女の子は慌てて立ち上がろうとしてよろめく。

「ッ...いた...」

「ちょっとしばらく椅子で休んどいた方が良くない??」

「う、うん...ありがとう。そうするよ」

女の子はそう言ってゆっくり階段を下りていった。

「大丈夫かな...」

そう呟く俺の隣にいつの間にか匠海が来ていた。

「だあいじょぶじゃね??結構大丈夫そうだったぜ」

「お前何してたんだよ!!」

「何って、別に」

いや助けるよ(汗)

「俊もよく助けに行くよな。ああゆーのはほっといて良いのに」

チュッパチョップスを口のなかで転がしながら言う匠海に俺は驚きの目をむける。

「お前正気かよ??」

「...お前こそ正気かよ」

「ああ!？」

匠海はポリポリと頭を二三度搔いたあと、「行こうぜ」と言って、歩き出した。

「はあ??」

何だか匠海の機嫌が悪い。

本当にどうしたのだと聞くと彼は俺の顔を一瞥して、なんともムカつく言葉を吐いた。

「ま、恋愛の経験不足はそんなもんか」

「...」

お前それ、ダチに言う言葉じゃなくね...??

「しゅーん」

「んあ??」

放課後、匠海が窓の外を指差して言った。

「来てんぞ」

「は??」

「あ、の、おんな」

あの女??

誰だと思いつつ窓の外をのぞく。

窓から見える校門の前に突っ立っている影がひとつ。

目を凝らすと昨日、駅の階段でこけた女の子だった。

「あー、れ??」

何故いる。

頭のまわりにハテナをまきちらしていると匠海が鞆を持って俺の肩に手をおいた。

「ま、せーぜー頑張れ。俺は帰る」

「はっ!?ちょー待って!!俺を一人にすんなッ!!」

ガシッと彼の腕を掴む。

「おやおや、どうしたんだい??俊坊や。一人にすんなあとか、俺に惚れちゃった??だめヨ俺ゲイお断り」

「ちげええええ!!!!!!」

なんていやらしい顔なんだ。

胸の前でバツェンを作っている匠海の頭にチョップをくらわせた。

「んだよ。じゃあ良いじゃねえか。んじゃなあ」

「よくねえよってオイ匠海ィッ!!」

俺の声も虚しく匠海はひらひら手を振って教室を後にした。

と、とりあえず...

知らぬふりで校門をでよう。

うん、それだ!!

いいぞ俺!!

目の前の校門を目指して歩く。

「あの...」

あ、やっぱ来た...(泣)

「...はい」

振り返って女の子を見る。

「あの、昨日は、ありがとうございました」

敬語で言う彼女に俺は苦笑いする。

「ああいえ...つかタメで良いスよ。どーせ俺1年なんで」

「ああ、そう」

そして彼女はふわりと笑った。

...かっ可愛いぞっ。

女の子は髪を長くし、赤ぶちのメガネをかけていた。

「あー、えと、今日は誰かに用スか??」

「あ、ううんっ、あなたにお礼が言いたくて」

お礼??お礼程のモンかあれ(汗)

「そんだけなのにこんな不良高校に??」

「ええ。私、ああやって気にかけてくれるってめったになくて...それにあなた全然不良に見えないから」

「はは...」

だって喧嘩ヤだし。

「私は月代由花。今、高2なのよ」

「へえ」

...月代...??

どっかで聞いた名だな。

「俺は村崎俊ッス」

互いの名を名乗り終えた後、俺はここが水コーの校門だということを思い出した。

「つ、つーか...場所、移動しません??」

校舎に目を向けながら言うと由花先輩は(すでに先輩呼び(笑)苦笑して言った。

「そうね」

俺達はゆっくり話せるマ●ドへと移動した。

月代由花(ツキシロユカ)

山代高校2年

...何、この展開...

移動してから気付いた。

俺、女の子をマ●ドに連れ込んで何してんだよ...(汗)

「あーえと...由花先輩はどこ的高校なんスか??」

「山代高校よ。あなた珍しいわね。みんな私たちの服見たらすぐに山代高校??って聞かれるもの」

質問ミスッ!!(爆)

「ああ、いや、俺、学校について全く知らねえから...。実際うちの学校が県内ワースト1の不良高校とも知らずに入学したんスよ」

「それ本当??」

由花先輩は口をおさえ、クスクスと笑う。

高校生なのに綺麗に笑うなあと思った。

俺の学校の女子共はクスクスでもないゲラゲラと笑っているのだ。

少しの談笑をしていると外はいつの間にか真っ暗だった。

「あー、話し込んでしまった。すみません」

俺があやまると由花先輩は狼狽えて弁解した。

「あやまることないよ。楽しかったし。こちらこそありがとう。いきなり俊くんの学校おしかけちゃって困ったでしょう??」

「いえ、俺も楽しかったんで良いです」

その後、席を立ち上がり、別れた。

俺は由花先輩に心惹かれていた。

皆、俺の事を

単純だ

と言うだろう。

単純でいい。

いつも単純だし←

あ、アドレス聞くの忘れてた。

「ちゅーす」

「おお匠海」

翌朝、登校して匠海と挨拶を交わす。

彼の顔はいつもより傷だらけだった。

「つかお前またキズ作ってんな。昨日ケンカしたのかよ」

「ああ、うん、丁度イライラしてっときに絡まれたし買った」

「んで今回は??」

「Win!!」

ガッツポーズを決める匠海。

いつもコイツが喧嘩する度に勝敗の結果を教えたがるので最近はこちらから聞いてやっている。

「おめっとさん」

「ふっふっふ、この月代匠海!!番長になるために今日も頑張るぜえッ!!」

「番長になるためにやってんのかよ...って、え!?今、月代って言った!?!」

「ああ??何言ってんだよ。俺ン名字だろ」

しくった。

そうだよ、コイツの名字だ。

ダチの名字忘れてるとかどんだけバカなんだよ俺。

「お前...」

「あ??」

「おまええ」

息を吐くように匠海を呼び、勢いよく彼の肩に腕をまわした。

「言えよおおお」

「うざっ」

俺のテンションに匠海はガッツポーズを解く。

「月代ってお前、由花先輩の弟だったんだろ??」

「...」

俺は昨日の出来事を詳しく話した。

「...ああ、そう」

「反応、薄。お前の姉貴だろ」

匠海は少し黙り、俺の手をはねのけた。

「それが??」

「あ??」

鈍い答えに彼は厳しい目で俺を睨む。

「ンなの知らねえつってんだ」

いつにない迫力に俺は押し黙ってしまい、匠海は本鈴が鳴ると同時に目を反らした。

ふ、不良にケンカ売ってしまった...!! ←

「た、匠海くん」

注意*今の台詞は俺です。

「あゝ??」

明らか怒ってます匠海くん。

「エト、さっきは、ごめん、ネ??」

「うぜえ」

きゃ——っ

どうしよう、匠海が怖いなあ。

うむ。

「えとな、匠海くん。先程、俺が何か嫌な事言ってたら悪かった。許しておくれ」

「うぜえつってんだろ」

ぎゃーッ!!不良に睨まれたっ。

俺は喧嘩したくないだけなのにーッ!!

しばらく睨み合う。

負けてられっか。今まで俺が快斗のせいでどんだけ嫌な目にあっただか。その度にならめっただけは成長した!! – 自慢そこじゃなorz

ふと匠海が声をもらす。

「お前いま、喧嘩したくないだけなのにーとか思ってたろ」

「なッ!!」

何故わかる!!

驚いていると匠海はいつもの顔に戻っていた。

「ヒヤハ、お前ホントおもしれえ」

「ム!?!」

「喧嘩なんてしねえよ。つかお前別に悪くねえし」

何だと!?!人が1限の間、どう謝ろうか散々悩んでたのにッ!!

「ヒヤハハッ!!」

笑ってんじゃねえええ!!!!

「たあくみ」

3日がたっただろうか。

窓の外を見ている匠海に声をかける。すると彼は不自然に荷物をかついだ。

「あーワリ、今日、ちょい番長に用あんだよ。先帰って」

「...今日、番長休みつってたぞ」

「...あー、そ、まじで...」

ウソです。

あまりにも不審すぎてウソをついた。ケンカ嫌いな俺が番長の休みなんて知るわけねえだろ。馬鹿じゃねコイツ。

「てめーがな」

心読まれたッ!!

「つか休みか...なら、裏門から出よーぜっ、なっ」

どうやら心を読まれたのは最後のフレーズだけだったようだ。

「んで裏門よ」

「たまには良いじゃねえか」

「はあ??」

「ア??やんのかコラ」

すんまっせ...(汗)

またまた数日後。

「うおっし、帰っかあ」

「うああ俊!!ちよい番長に用事があ!!んじゃあなあ」

「今日も休みだと」

不審すぎるぞ匠海。

「～...な、何でお前が知ってんだよ」

匠海は脱力して鞆を下ろす。

「いや、ひよんな事から裏番長と知り合いになりまして...」

「は!?まじか!!ンでお前が!?!」

いや、ホント最悪な出会い方したわーうん。

「詳しくは聞くな。つーわけで帰んぞ」

「あー、んじゃ裏門からで!!」

「...お前、最近変だぞ??」

「ああ??」

何かから避けるように裏門から出たがる。

「正門に誰かいんのか??」

ビクリと匠海の肩が動き、凶星だと伝える。

そして俺は言ってやった。

「逃げんのかよ」

《誰が逃げるって!?!》

正門に向かって二人で無言で歩く。

俺はゴクリと喉をならした。

匠海が避ける程だ。よっぽどなのだろう。

しかし正門を出て辺りをみわたしてもめっちゃ怖エ!!って奴はいない。

「匠海、何もねえじゃねえか」

「お、おお、そうだな」

その帰り道、匠海と別れて自分の帰路につく。

その時、背後から声がかかった。

「俊くん??」

その声に反応して振り向くと由花先輩がいた。

「あ、由花先輩」

「久しぶり俊くん」

この美人が匠海の姉なんだよな...。か、考えらんねえ。

このまま帰るのもおかしいし、俺達は公園に向かった。

「凄いひっそりしてるのね」

「あーもうこの辺に子供たちいねーんスよ」

「そっかあ」

そこで途切れる会話。

ん、アレ、俺何かマズイことした??...したよな、公園で!!

「とっ、とりあえず、ベンチ座りましょっ」

心臓の音がうるさい。

やべえ。

頭の中で危険信号が鳴っている。

ふいに由花先輩の口が開いた。

「俊くんて、今カノジョいる??」

そんな意味深な台詞を吐くな!!

「い、いえ、フリーッス。つか俺非モテなんで」

「そんなことないよ」

「カノジョ欲しいんスけどねー。やっぱ上手いかなえんスよー。って...え??」

急に由花先輩が距離を縮めてきた。

「そんなことないよ。少なくとも...私は、...好き...」

…

…

…

思考停止により。

迫られ、薄く目を伏せ、唇を開いている。

これで

誘惑されない男子はどこにいるだろう。

あまり慣れぬ顔を近付け、唇を重ねた。

久しぶりの口付けは

凄く

緊張した。

「お前、バッカじゃね」

いきなりの罵倒。

何が起きたか。

俺は昨日、由花先輩と付き合う事になったことを匠海に告げたのだった。

「バカとは何かね匠海くん。俺にはカノジョ出来たのだよ」

「誇らしげにしてんじゃねーよ。ホント馬鹿だわお前。さすがの匠海くんも呆れるよ??縁切っちゃうよ??」

「うあーっ!!すみませんすみません馬鹿です馬鹿ですよー!!」

この学校で生きて行くには匠海がいないと俺は死んでしまう。

肩がぶつかっただけでもキレられるこの学校。恐喝、カツアゲ、暴力...幾度もされそうになっては匠海に助けられている。

「ハイじゃあ俊くん、どこがバカだったのか言ってみましょー」

...確かに昨日は軽率すぎた。

「わかってんじゃねーか」

どっかりと机に足を乗せている匠海の横に立ち、彼の机に手をおいた。

「うー、だって迫られたらしちゃうだろ!!」

「●●x??」(ピー)

「ちっげーよ!!そこまで行ってねえ!!」

顔が熱い。

赤面しているのだろうか。

「わかった。ディープキスだ」

公園でそんな深く出来るか!!

「ただのキスだよ」

「へえ。まあ、迫られて男の性でよく耐えたな。普通無理だべ」

そう言いながら匠海はエロ本を取り出して広げた。

コイツどんな神経してんだ(汗)

「だろ!?つかまあお互いの事はこれから知るってことで決着ついた」

「へえ、そう」

反応が薄くなってきた匠海に俺は気まずい気持ちになった。

コイツの姉と付き合うことになったのだ。弟として嫌だろう。

「...悪ィな...」

ボソリと呟くと匠海はエロ本のページをめくって言った。

「...別にイんじゃないね。ま、気を付けな」

俺はその言葉にどんな意味が含まれているかなんて
考えもしなかった……

「俊、ゲーセンよってこーぜ」

珍しい匠海の誘いに俺は喜んでついていった。

ギャーギャー騒ぎ終わった後、俺達は荷物を持ってゲーセンを出る。

すっかり真っ暗になった道を並んで歩きながら匠海がいつものチュッパチョップスをくわえて聞いてきた。

「今日は良かったのか…??」

「え、何が??」

「いや、だから…」

歯切れの悪い彼に俺は答えを与える。

「由花先輩??」

「…その辺」

カランと口の中で飴を転がして言葉を濁した。

「ああ、別に。今日会う約束してねえし。電話はするつもり」

「あっそ」

前方に影が見えた。

俺達が電灯の下に立っているから影の姿はわからない。

影が、喋った。

「俊くん??」

デジャブを感じ、声の主に応える。

「由花先輩??」

「やっぱり俊くんだッ!!」

テトテと近寄ってきた由花先輩は匠海を見て少し笑顔を見せた。

「匠海」

俺は反射的に隣にいる彼を見て不審に思った。

何とも言い表しにくい表情。

ただ、喜びに属するような表情は一切、含まれていなかった。

街灯に照らされているなか、お互いの顔を見合わせる。

俺は沈黙を守る匠海を小突くと彼は我にかえった様に険しい顔になった。

「あんだよ」

険悪なムードが流れているのは気のせいだろうか。

「あ、ゆ、由花先輩、あの」

「俊くんって匠海と仲良くしてくれてたの??」

話しを楽しい方向へと向けようとしたが失敗に終わった。

「や、つか...俺がむしろ仲良くしてもらってるってカンジなんスけど」

「そだったんだ。匠海と仲良くしてくれてありがとう」

由花先輩がその言葉を発した時、隣で物凄い殺気が膨らんだ。

「姉貴ヅラしてんじゃねえよ」

低く呟かれた言葉。

ギョッとして匠海を見ると彼は舌打ちをして前方に向かって歩いていった。

「お、オイ匠海!？」

そして角を曲がって匠海自身の家に帰っていった。

「俊くん」

「あ。...何なんスかねアレ」

戸惑っていると先輩は今度は少し悲しそうに笑った。

「いつもああのなのよ」

「へえ、そうなんスか」

何か変だ。

気持ち悪い。

匠海から由花先輩への対応が一番おかしい。

あれは姉に対する態度だろうか。

そりゃ姉弟は仲があまり良くないところもあるがそれとはまた別の違和感が生じた。

由花先輩を送って自分の家に帰った俺は快斗と共同である部屋に向かった。

「ただいま」

ノックもせずに入ると、そこには薔薇の世界が丁度始まろうとしていたところだった。

「あ、俊くんおかえりい」

この声は快斗の今の恋人、麻間涼二(アサマリョウジ)。生徒会長兼、裏番長を勤めている。聞いたところによると番長である麻間了とは双子だという。

「あー、涼二さん...ばんわ」

快斗を組み敷いている涼二さんはこっちを見て笑顔で対応した。

「ごめんねー、今からちょっとだめだなあ」

快斗はそれを聞いて言う。

「涼二、今日はやめよう」

「え、何で」

「俊が帰ってきた」

俺のせいにしないでッ!!(汗)

「良いよ俺下いるから。快斗、落ち着いたら言えよ」

苦笑いをしてリビングに向かおうとするが、快斗が大きな声で俺を止めた。

「何だよ」

「何か話してえんだろ??」

凶星を指され、返す言葉に困る。

「聞くから」

「後で良いって」

「よくねえ!!」

俺達が睨みあっていると涼二さんが手をあげた。

「ねえちょっと」

彼はため息をつきながら快斗を解放する。

「もう萎えたよ。なに俊くん、相談??俺ものるよ」

「いや、悪いです。ホント」

「いーよ。生徒会長命令。座って話しなさい」

生徒会長の命令なら仕方ない。

俺は二人が服を整えてベッドに座るまでの間、何から話そうか考えた。

「...俺のダチに、匠海いんだろ??」

快斗はそれに頷き、涼二さんは頭をかしげながら聞く。

「あの一、あれだろ??えと...月代匠海」

「そう。何で知ってんスか??」

「ああ、了ちゃんが気に入ってね。いつも、つつきーつつきーって言ってやんの」

「そうだったんスか。で、その匠海が...(略)」

匠海と由花先輩の関係について何であんなに変に感じたのだろうか話す。

「ってカンジなんスよ。俺、超気まずくね??みたいな」

「確かに」

快斗はうんうんと親身に頷くが、突然顔をあげた。

「つかお前カノジョ出来たのかよ!!」

「お、おう」

「すげえすげえ!!お前が出来たんだな」

大はしゃぎして喜んでくれる快斗に問題そこじゃないからと呆れる。

惨めだ。

ギャーギャーと騒ぎ始める俺達をよそに涼二さんが口を開いた。

「それってサ」

ピタリと止まる俺達双子。

「義理の姉ちゃんだからじゃねーの??」

「「...え??」」

「いやだから、

匠海にとって由花は

義理の姉

だからだろ」

「匠海!!」

翌日、俺は朝っぱらから匠海を屋上に呼び出した。

1限の始まるチャイムが鳴り響く。

「あんだよこんなトコ連れてきて。1限始まったじゃねえか」

とりあえず不良が1限の授業を気にするなんておかしいと思います。

そんな冗談も言えずに俺は匠海をまっすぐ見つめて言った。

「お前、由花先輩とは義理の姉弟らしいな」

こんな酷いこと、匠海の傷をえぐる様なマネはしたくない。

彼は自嘲気味に笑って言った。

「...それが...??」

以前と同じ答え。

その不良の目。

俺は生唾をのんで恐怖を抑えるため、両手に拳をつくった。

喉が開かない。

本能がこれ以上近づくなと警告している。

そしてやっところさ出た言葉。

「何でそんなに嫌うんだよ」

「...あゝ??」

匠海の額に青筋が浮かびあがった。

「だっておかしい...。義理でも、姉貴は姉貴じゃねえかッ!!」

俺の言葉を聞いて怒りが頂点に達したのか、彼の目が憎しみに燃える。

入ってくるな。

まるでそう言われてるみたいだった。

「てめえには一生わかんねえだろうよ。俺の...——...」

最後の方はあまり聞こえなかった。けど、俺は始めのフレーズが気に入らなかった。

「知ったこと言ってんじゃねえ!!」

「あ??」

「わかる!!これからわかるから!!」

何を言っているんだ俺は。

俺は危険区域に入ろうとしている。猛獣が住んでいる様な危険で、複雑な道に。

それでも俺等は。

「ダチだろ!!!!」

精一杯の声で叫ぶ。

もしかしたら窓が開いている教室に聞こえているかもしれない。

そんなの

関係ねえ。

届け。

お前が背負ってる荷物、少しでも良いから、分けてくれ。

しばしの沈黙の後、匠海が重いだろう口を開いた。

「...ガチで言ってんのか」

頷く。

「俺がこれから言うこと、お前に受け止められんのか」

「なめんな」

「...じゃあ最終警告。由花と別れることになっても良いんだな」

...何だそれは。

「...」

黙ってしまう俺に匠海は、どうなんだと問いかけてくる。

由花先輩と別れる??

衝撃が大きすぎて目を見開いたまま停止してしまった。

「その覚悟がなけりゃあ...」

匠海がそう言いかけた時、校門から他校の奴らがケンカ売ってくる声が聞こえた。

彼はすぐにいつもの人をからかうような顔をして言った。

「ウソだよ」

「...え」

「うーそ。お前まんまと騙されてんじゃねえよ」

匠海はじゃあなと手を上げて校舎に入っていった。

うぜえ。

匠海相手にこんなに強く思ったのは初めてだった。

「嘘なんかつかなくてイんだよ」

お前の目は

「助けて」と

叫んでるじゃねえか...

このツンデレめッ!!!!(爆)←

どうしたら良いのでしょうか
誰か教えてください
この世に神様がいるのならば
神様、どうか...
カミサマ

匠海と由花先輩を天秤にかけろと彼は言った。

普通に考えたら由花先輩だろ。

でもなあ...

「そりゃダチは一生モンだろ」

快斗がベッドに座って答えた。

「けどよお...」

渋る俺に彼は持論を話す。

「俺は一、ゲイだからダチいねえんだよ。やっぱ何つーの。偏見??みたいなんがあるらしーんだわ。けどよ、恋人だけじゃダチ特有のハナシもできねえじゃん。恋人にカッコつけたりして...めんどくせえ時もあるわけよ。そーゆ時って頼れんのは最終ダチじゃん。喧嘩して仲直りして...そーゆの、俺も欲しかったケド、あいにく俺みたいな奴は受け入れてくんなかったワケ。まあ...俺は俊がいたからまだ良かったんだけどな。そー考えたら、ダチって大切だと思うぜ??」

すんげー暗いこと言われた。

「だから匠海選べって??」

「まあ、俺だったらな」

ふむ、と考える。

究極の選択すぎて頭がショートしそうだ。

快斗はお菓子とコーヒーを持って言った。

「二兎を追うものは一兎をも得ずって知ってるか??」

それらを快斗自身から離す。

バカにすんなと言ってやりたい。

「今のお前はそれだ。欲張るな、よおく考えろ。これからはお前次第だ」

何だと。

とりあえず俺は一晩じっくり考えた。そして結論。

《両方を選ぶことは出来ない。

匠海を選べばずっと一生の仲でいられる。しかし由花先輩を失う。

由花先輩を選んだら匠海とは破局の可能性アリ。

そして由花先輩ともこれからの人生別れる可能性大。俺寂しくね!?!》

翌日、登校して匠海の所へ行く。

そして言ってやった。

「由花先輩と別れる覚悟はできた。俺は匠海を選ぶ。だから、俺に全部話せ」
キマッタ...

彼は軽く目を開く。

「何言ってるんだよ」

「え??」

「お前何言ってるのかまったくわかんねえ」

コイツ、鼻で笑いやがった。

もう、漫画の世界に例えたら今の俺の気分アレだ。

ムツカアーーーーッ!!

だ。

勢いよく匠海の机を叩く。

「俺は!!お前と上辺だけのダチなんて嫌だ!!」

「.....お前うるせえ」

「ああ??」

匠海は椅子から立ち上がって俺の横を通り過ぎた。

すれ違い間際に言われた言葉。

「屋上に来い」

「お前やっぱ馬鹿だろ」

「ってオイッ!!(汗)」

屋上に来て一言目がそれかよ。

何か今ちょー真剣じゃなかった??

ん??俺の気のせい??

てかさっきの匠海の呼び出し方って決闘だったよな(怖)

匠海は俺の向かい側でフェンスに寄りかかり、ため息をついた。

「俊には、まいったよ」

いきなりの弱音に俺はびっくりする。

「おめえ、何でそんなに俺のことまっすぐ見んの」

「え...」

そりゃだって、ダチだし。

匠海は苦しそうに笑い、言った。

「俊、最初に言っとく。悪かった」

「え、何で」

「何でそんなに嫌うのかって聞いてたよな...」

昨日の事を思い出して頷く。

「まあ、その辺は色々あって...先に、言っとかなくちゃなんねえ事がある」

そして匠海は、言った。

「由花は、俺が初めて抱いた女だ」

初めて抱いた女

「……、…どう、ゆー…」

驚愕でまともな言葉が出てこない。

義理の姉。

そして初めて抱いた女。

俺が戸惑っていると、匠海はうつむいて続けた。

「これが俺の犯した過ちの1つ」

§ てめえには一生わかんねえだろうよ。俺の…——… §

あの最後に入る言葉は、「あやまち、なんて」…

「1つ??」

「もう1つあんだよ。それは、元カノを死なせてしまったこと」

遠い目をする匠海に対し、俺は目を閉じる。

そんな俺を見てか、匠海が言った。

「やめるか??話すの」

「…今更だ」

「はっ、だよな」

そして匠海は、話し始めた。

己の罪を。

「…元カノ…ユカって言うんだよ。俺の義理の姉と漢字違いの名前。結ぶに香るで結香」

俺は匠海の隣に行って座り込み、フェンスに寄りかかる。

彼も座り込んだ。

俺との距離は1mといったところか。

「んで、彼女は俺を愛しすぎた。自惚れじゃねえ。本気で彼女は俺を愛してた…自分を追い込ませるまでに…。彼女は言ったよ。匠海がそんなに私のことで悩むなら、私はいない方がよいよね」

つらい。

聞いていて、つらい。

「俺は別に彼女のことでは悩んでなかったんだ。丁度、再婚話が出てて悩んでただけで、彼女は何も悪くなかった。けど彼女は、こう言ったんだ。匠海の事を愛してる。凄く凄く愛してる。でもいつかその熱が冷めるかもしれない。悩みも、解消してあげられない。どうしたら良いんだろう」

好きで、好きすぎてどうしたら良いのだろう。

たどり着いた結果

「彼女は翌日…」

死んだ。

そうだ、時を止めてしまおう。

時を止めたら、私の彼への想いは永遠だ。

そして私のことで、もう悩まない。

愛してる、愛してるよ匠海。

私は永遠に、貴方を愛してる。

「俺達がまだ中1の時だ。遺書と言う遺書はなかったけど、俺宛にメールがあって…」

「何て??」

「ずっと愛が綴られてた。俺驚いてサ、一応、俺も愛してるって送っといた。それを彼女が見たかは知んねえけど…。んで俺はグレて不良走って、親の再婚もヤケクソで、良いんじゃない??って返事した。そしたら…今の由花がついてきて、それは、死んだ彼女とそっくりの顔だったんだよ」

彼はなんて酷い人生を送ってきたんだろう。

「こっからは俊、覚悟して聞いてくれ。お前にも関わる事だ」

「…」

「由花の顔を見て驚いて狼狽えてた俺にアイツは死んだ彼女の事を全て俺に話させた。顔がそっくりっていうことも。アイツは口がうまかったし、そんときの俺は精神的にまいってた。そしたら」

【私、匠海くんの相手してあげようか??】

皮肉にも彼女と一線を越えていなかった俺はまんまと由花の言葉にハマリ、初めて、女を知った。

【…ごめん。俺…】

由花はメガネを外し、服を乱した状態で俺を一瞥して笑った。

【結構良かったよ】

嘲笑うかの様に。

【匠海って馬鹿だよな】

【…え??】

【あたしがやった事なんて
ただの

エゴだよ】

冷めた目で....。

「え、由花、先輩...??」

いつもの感じと違う恋人の影に戸惑う。

「...アイツは酷エ奴だったんだよ。人のこともてあそんどいて、普通に嘘をつきやがる」

匠海はつらそうにこっちを見て言った。

「...悪かった俊、...知ってながら言ってやれなかった」

「た、匠海??何言ってッ...」

「アイツが俊に話したことは全て、嘘だ」

何を言っている。

俺達はつきあってて、彼女も俺を想ってて、俺も彼女のことが好きで...

「た、匠海、俺は」

「例えお前がアイツのこと想ってても、アイツはただの偽善にしか思ってねえ」

「...ッ、そん、な...」

嘘だ。

嘘だ絶対うそだッ!!

「嘘じゃねえッ!!俺はあの時からずっとアイツと暮らしてる」

「嘘だ、何言ってんだよ匠海。由花先輩は優しくて、いい人だ」

そうだよ。由花先輩はこんな俺を好きだって言ってくれて、いつも優しくて、俺のつまらねえ話にノってくれてっ

「たくっ...」

匠海にすぎるように目を向けると、彼も俺の目をまっすぐと見つめていた。

「俊、ホントに、悪かった...。止めてやろーともせずに」

匠海の目には涙が浮かんでいて...

「ホント、なのか...??」

「...ダチに、嘘つけてのかよ」

苦しい

彼の声が聞こえてくる。

過去はどうあがいても消えない。

「ごめんな...ごめん」

俯いて呟き続ける匠海に、どう声をかければ良いのだろう。

「...匠海、顔、あげろって」

彼は顔を上げて涙を流すのを堪える顔を見せた。

「お前は、何も悪くねえ...」

匠海を救える様な言葉は何か。

「俺は、ただ自分からハマっちゃっただけで、お前は何も悪くねえからっ」

「...しゅ...」

「辛かったよな」

瞬間、匠海の瞳から涙が零れた。

「匠海、もう大丈夫だから...」

ぼろぼろ、ぼろぼろと水滴が流れていく。

匠海は泣きながら叫んだ。

「俺はっ恋人殺してっ、義理とは言えど姉に手を出してっ、俊にまで嘘ついてッ...」

ずっと、罪を感じてた。

「匠海ッ!!!!」

出せる限りの声で叫ぶ。

彼の両肩に手を置き、目を合わせて、訴えた。

「大丈夫だからッ!!!思いっきりッ...

泣け!!!!!!!」

《男は泣くもんじゃねえよ》

入学してまもなく、匠海は道端で泣きじゃくる男の子を一瞥してそう言っていた。

「...う...あ...あぁッ...」

右手で俺の袖を掴む匠海。

「ふっ...ごめっ...おとこはっ泣いちゃいけねえっのに...」

大丈夫だから...

「あー、すっきりした」

鼻水をすすり上げ、床に寝転ぶ匠海。

「こんなに泣いたの久しぶりだぜ」

俺もその隣に寝転ぶ。

「なあ、俊」

「ん??」

「...サンキュ、な」

照れくさそうに言う彼。

俺は返事を無言にしておく。

そうすることで匠海の心も少しは楽になるだろう。

そのかわり彼の視界に入るくらいの笑顔を見せておいた。

もくもく、もくもくと、雲があがる。匠海はその空を見て何を思っているのだろうか。

死んでしまった彼女を探しているのだろうか。

俺は横目で匠海を見て、また空に目を戻した。

「俺」

そして彼に向かってある決意をぶつけた。

「由花先輩と別れる」

「俊くんっ」

校門で待っていた彼女はふわりと微笑んで俺に駆け寄ってきた。

「由花先輩ッ!!」

俺の後ろに匠海が控えている。

「匠海も今日はいっしょ??」

「は、はい」

「そう」

この笑顔が、全ては嘘、なんだよな...

「由花先輩、俺、今日はお話したいことがあります...」

「ん??どうしたの??」

可愛い顔をされると決心が揺らぐ。俺は彼女から目をそらして無言で歩き始めた。

告白された公園へ向かう。

それまでは3人ともずっと無言だった。

砂を踏む。

夕日が俺達に降り注いだ。

「俊くん...??」

軽く口を開く。

声が出なかった。

なんで...

少し離れた所に立っている匠海が俺を呼んだ。

「俊」

ためらうな。

決めたんだろ。

「ゆか、せんぱい...」

「ん??」

「別れましょ」

「...え...」

「俺達、別れましょ」

目を大きく開ける彼女。

「あ...」

悲しそうなその顔につい手を出してしまいそうになる。

「俊ッ!!」

待て。

俺は、ダチを信じるんだろ...。

「...アンタッ、俺を騙してたんだろッ!!」

声をふりしぼる。

俺と付き合っているのはただの偽善でしかない。

「なんのこと...??」

ヤバい

心が折れそうだ。

そんな顔すんな。

...どっちなんだよッ!!

その時、低く、太い声が聞こえた。

「とぼけんじゃねえ」

匠海の牽制に、由花先輩は軽く俯いて、言った。

「あーあ、ばあれちゃった」

「たくみい、何で言うかなあ」

突然、由花先輩の声と表情が変わる。

忌々しげに匠海を睨んでいる。

「てめえが俺のダチを騙したからだ」

「へえっ、アンタに友達つくれたんだあ」

鼻で笑う彼女。

俺は目眩がした。

これが、本当の由花先輩。

「そおいやアンタが初めて抱いたのってアタシだったよねえ。それも話したのお??あ、アタシとそっくりな彼女のことを殺しちゃったんだっけえ」

次々と匠海の傷をえぐっていく女。

俺は1つため息をついて、由花先輩を見た。

「由花先輩」

一瞬

意識が飛んだ。

気がつけば女は俺の前で尻餅をついている。

自分の手には強く握られた拳。

無意識に殴っていた。

それを認識して、しゃがみこみ彼女の胸ぐらを掴む。

驚いて目を開く由花先輩に、言ってやった。

「ゲス野郎ッ人間のクズガッ」

「俊、あんなこと言うんだな」

俺が暴言を吐いた後、由花先輩をおいて二人で俺ン家に寄った。

「ああ??言うわボケ。あークソうぜえー」

苛立っている俺に匠海は控え目に言う。

「俊がそこまで言うのは珍しいぜ」

そーか??

ゲームを取り出してコントローラーを匠海に渡す。

快斗はまだ帰っていない様子だった。

「...匠海」

「んー??」

マリオカートでクッパを走らせながら話しかける。

「俺さあ、間違ってた??」

由花先輩をフツて、拳げ句に殴った。

「ぜんっぜん。むしろ正解だぜ」

「でもお前帰ったら困んね??」

俺が言っているのは匠海と由花先輩のこれからの関係。

「別に。つか、俺、アイツとはもう籍、外すんだ」

いきなりの告白に俺は驚いてクッパを毘にかけてしまう。

「クソッ...え??籍外す??いきなり??お前独断??」

俺の混乱に匠海は苦笑した。

「親...義理の親が浮気してるのが発覚してよ...つか、もうどーしよーもねえ親子だったんだよ。母親、うんざりして、この前離婚について俺に聞いてきた」

「...そーか」

「もう結婚なんてさせねえよ。つか、結婚するとしても俺が見て、判定する。母親は俺が不幸にさせねえ」

マザコンがいる。

なんて言わねえよ??こんなシリアスな場面で。殺される(爆)

「んじゃあさ、匠海、お前が潰れそうになったら、俺が支えてやる」

俺、今ちょー良いこと言ってない!?

丁度、匠海のルイージがゴールする。

彼は鼻で笑って言った。

「お前に何ができんだよ」

「なッ!!」

うざいぞ匠海!!

コントローラーを放って匠海の首を絞めにかかる。

俺の部屋に笑い声が響いて、ふと気付いた。

やっと、いつも通りになった。

時計の針が11:30を差した。

匠海はとっくに帰り、俺は二段ベッドの上段に寝転ぶ。

目を閉じた。

瞼の裏には由花先輩の優しい笑顔...

部屋の扉が開かれたと思ったら快斗と涼二さんの声が聞こえた。

部屋を暗くしているため、俺がいないとでも思い込んでいるのだろう。

二人はすぐさまそういうムードに持っていき、下段のベッドに倒れこんだ。

もうどうでも良かった。

ベッドが揺らぎ、声が響く。

別に初めてではない。

俺は息を抜いて夢に誘われ、眠りに落ちた。

朝を迎える。

いつもの無機質なアラーム音を止め、もう一度布団に潜り込む。

正直、学校に行ける気分ではなかった。

「俊、朝だ起きろ」

快斗の声に曖昧な返事をする。

「...なんだ、由花とやらと別れたのか」

「...んー...」

快斗は学校へ行き、親も出勤した。

独りの家。

独りの部屋。

涙が、自然と浮かんだ。

由花先輩は優しかった。

可愛かった。

好きだった。

由花先輩の前に付き合った娘を思い出す。

【好きな人ができたの。】

そう言われて別れた。

その娘が好きになった相手は、快斗だった。

だからといって快斗にあたりはしていない。

彼は別に悪くない。

「...俺は本当に、女運が悪ィ...」

しかも匠海の前では平気装って、馬鹿みてえ...
しばらくして腹の虫が鳴る。
カップ麺を食べてまたベッドに潜る。
コチ、コチ、という時計の音がうっとうしかった。
騙された自分が悔しい。
匠海を苦しめる由花先輩がうざい。
何もかもがイラつく。

知らぬ間に寝ていた。

しつこいインターホンの音で起き上がりテキトーに着替えて玄関に向かう。
「はいはい何ですかうざいですよ。勧誘お断り。インターホン壊れたら弁償ね」
扉を開けながら一気に捲し立てる。
そこには匠海が立っていた。

「あ...」

いつもより一層傷をつけてニツカリ笑っていた。

「よッ!!」

玄関の時計で現在の時間を確かめる。
まだ昼の2:00だった。

「お前、何してんだよ」

「いやあ...なあ、俊。こんな所で言うことじゃねえんだけどよ」

「ああ??」

彼は普通の笑顔に戻り、言った。

「次は、俊が泣く番だぜ」

「...え」

何を言っているんだコイツは。

俺は別に...

「ばあか。泣きやいんだよ。ただし、今日限定な」

「...」

「あんだ??今日だけだぜ??」

匠海

何でお前はそんなに優しいんだよ。
お前の方が傷ついてるクセに。

「...ッ...ふっ...ぐ.....」

「おうおう、盛大に泣いて良いから、お前の部屋に行くぞ」

「うーっ...」

「ヒヤハ、ばあか」

どうせ俺は馬鹿だよ。

けどなあ、...馬鹿だから...

一途なんだよっ

このやろー

蝉が鳴く...
ミーン、ミーン...
ジー...————

「うあゝ づっ!!」
屋上に出てもわっとした重い空気を受け止める。

「ちょお、匠海、やっぱ教室戻ろーぜ。暑ィ」
高校生活初めての夏。

海に行きたい。

「暑ィに決まってんだろ夏なんだから」

「じゃあ何で屋上!?!」

教室には扇風機がついててまだマシだ。

「さあ...」

「さあって、さあって!!言ったのお前じゃん!!」

「気分だよ気分。そゆ時ってあんだろ??」

いやねえよ。しかもこんな暑ィ時に。

すると匠海は相づちを打って大声を出した。

「そーだナンパしにこーぜ!!」

「いきなりだなオイッ!!」

撃沈。

撃沈しました。

またかよとかそんなツッコミ僕許さない。

僕悪くないもん。

ぼくっ...

「ドンマイ、俊」

ポン、と肩に置かれた匠海の手。

噛みちぎって良いだろうか←

今回は、いや、今回も、ナンパした女のコたちは偶然出くわした快斗によって全員追い払われた。

ん??追い払われた??...とりあえず、ナンパする度に快斗が現れやがった。

ああうざい。何故だ。

公園のブランコに座って匠海と某アイス棒ソーダ味を食べながら空を見上げる。

意外と都会なこの街は星があまり見えない。

「なあ俊、お前の兄って何、ブラコン??」

匠海は俺達が行く先々に現れた快斗の事を言っているのだろう。

「いや、ただ双子の特性なだけだよ。昔からそーゆことあってな」

「ああ、双子だから同じ様なこと思ってた行き先は同じみたいなやつ??...双子らしいとこちょっとはあったんだな」

まったくな。

沈黙が流れた。

この公園はあの忌々しい女に別れを告げた場所。

匠海が何かを聞きたいような素振りをしてみせる。

「んだよ」

「あ、ああ、いや... 1つ聞き忘れててよお...。俺と、その、由花...なんで義理って分かった??」

「ああ、生徒会長が教えてくれた。生徒会長、皆の家族構成把握してるし」

「生徒会長すげえッ!!」

気まずさを取り払う匠海に俺は付け加えた。

「あと、なんとその生徒会長...」

口止めされていたが致し方ない。涼二さんごめんなさい(汗)

「裏番長なんだよ!!」

またもや沈黙。

「...ま、まじか...」

匠海の驚いた顔に俺はニヤリと笑う。

「まじ。んで現、快斗の恋人」

彼は驚きの連続で目が大変なことになっている。

「...な、にっ、言ってッ!!」

「だから俺と涼二さん知り合ったんだよ」

カッカカッと笑うと匠海は一時停止して動かなくなった。

「ん??おい、匠海??おーい、たあくみいッ!?!」

コイツ、白眼むいてやがる(爆)

夏の夜独特の虫が泣く。

海に行きたい(二回目)

いや、切実に。

海行って、ナンパして、可愛い女のコと遊びたい。

それはともかく...

この夏までに匠海は名字が変わり、榊塚(ナギヅカ)匠海になった。

そして俺たちはまた友情が深くなった(...と思う。いや、思いたい←
んで来年も匠海は元気に不良やってるだろう。

誰だって辛い過去はある。

人はそれを乗り越えて強くなる。

てかこんな偉そーなこと言ってるけど、これからでも絶対いろんな事がある。

だって俺らまだ高1 だぜ??16年しか生きてねえっつの(笑)

けど俺たちはそれをバネにして生きていく。

俺にはダチがいるから

絶対に折れない。

— 信じあえる仲間 —

人生、仲間がいれば充分だ(笑)

END.